

十五周年記念日を迎えて

末 綱 恕 一

(1959年5月受付)

統計数理研究所が創立されたのは、昭和19年6月5日である。学術会議の建議に基づいて出来たので、当時は所長以下所員3名、事務数名をもつて、学士院の建物の一部に庁舎を置いたのである。研究所が設置された頃と思うが、神田の学士会館で会合があつた。黒い布で窓を遮蔽し電球を覆つた薄暗い所で、集つたことを想出す。翌20年3月には、所長と所員2名、助手2名を残して、信州飯田に疎開した。私は東京大学の数学教室が3月に信州諏訪に疎開したのに随つて行つたので、一度飯田の或る旅館における研究所を訪ねたことがある。東京に残つたものは、小石川の細川邸の一部を借りたので、終戦後は飯田に出たものも、ここに集ることになつた。

22年の正月初代所長の掛谷宗一先生が易簣され、同年5月私が所長を兼任することになつた。このときには定員も大分増加し、一部は大蔵省の一室を借り、研究所は二つに分れていた。大戦末期に出来て終戦を迎え、統計数理研究所という所は何をする所かという目標がまだ確立せず、種々議論を重ねたことであつた。結局、統計数理研究所は統計数理を研究する所であるという結論に到達したのである。今考えるとおかしいようであるが、このように原則が確立したことは、実によかつたと思う。

終戦後の混乱期に、研究所にも色々事件があり、運わるく所長に事故が続いて、27年9月佐々木達治郎博士が所長に就任されて始めて、研究所が次第に軌道に乗るようになった。佐々木博士が数値計算の権威であつて、リレー式であるが高性能の計算機を試作されたことは、まことに記念すべき業績である。不幸にして31年10月に病氣休職となり、33年4月私が併任の所長となり、今年3月末日本職の所長となつた次第である。

この度所長となつて来てみると、研究所は爾後十年ばかりの間に、優れた業績を挙げて全く見違えるように充実している。よくこれまでになつたと感慨に堪えないのである。日本は国土こそ狭小であるが、一億に近い人口を擁し、種々の近代工業が非常な発展をなしつつある大国であるから、統計はますます必要になるに相違ない。したがつて研究所はもつと拡充しなければならない時期に来ているわけである。中でも、林君の第二研究部では、O. R. などのために一つの研究室を研究部にしなければならぬ。青山君の第三研究部では、計算機を新たに設計して、電子計算機を作りたものである。また第三研究部に属している養成所を拡張して、外国の研究者をも受入れるようにしたいのである。

庁舎がまだ統計局からの借りものであることはまことに困るので、何とかして自らのものが欲しいと念う。研究所がいよいよ優れた業績を挙げれば、文部省も必ずわれわれの希望する拡充を承認してくれるであろうと、衷心期待している次第である。

統計数理研究所